

平成 22 年度大学院入学式学長式辞(平成 22 年 4 月 7 日)

今年は春の訪れが早く、先週半ば過ぎには大学構内の桜も満開となりました。その後、雨が降って少し心配しましたが、桜はまだ満開の状態をしっかりと維持してくれています。今日ここに埼玉大学大学院入学式を迎えられた修士課程と博士前期課程を合わせた 477 名、および博士後期課程の 58 名の皆さん、入学おめでとうございます。私は埼玉大学長として、壇上に列席しています理事・副学長、各研究科長とともに、皆さんを心から歓迎いたします。

とりわけ、世界各国から来られた留学生の皆さんと、職に就きながら学位取得を目指して入学されたいわゆる社会人大学院生の皆さんにつきましても、さまざまな困難な条件を抱えながら本学大学院で研究する道を選択されたことに対し、祝意と敬意を表したいと思います。

さて、本学は昨年 1 年をかけて創立 60 周年を祝いました。人生で言えば、60 年とは還暦であり、今年新しい 60 年の始まりの年に当たります。今年はまだ、2004 年 4 月に法人化された国立大学が第一期の 6 年を終え、新たに第二期中期目標期間が始まる年でもあります。そこで、埼玉大学は新しい年度を迎えるに当たって、「歴史を超えた大学の機能である知を継承・発展させ、新しい価値を創造することを基本的な役割とする」ことをあらためて確認しました。これは、「真理の探究」を合言葉にして大学づくりをしてきた創立以来 60 年の「知」の蓄積を踏まえ、知識基盤社会と言われる 21 世紀社会に「知の府」・「学術の府」として突き進んでいこうとする、私たち埼玉大学の決意表明であります。私は、ここに集われた皆さんにも是非この決意を共有し、実りある研究生生活を開始していただきたいと希望します。

本日は、その開始を記念する日でありますので、大学院での研究のあり方について少しお話しておきます。博士後期課程に入学した人は、すでに前期課程、修士課程で研究をしてきましたし、博士前期課程、修士課程に入学した人も学部の卒業研究で初歩的な研究の経験があると思いますが、ここで、あらためて研究のあり方について考えていただきたいのです。

皆さんは、『論語』にある 2500 年程前の孔子の、次のような言葉をご存知でしょうか。

「速やかならんことを欲する無かれ。小利を見ること無かれ。速やかならんを欲すれば即ち達せず。小利を見れば、即ち大事成らず」

これは、孔子が子夏という弟子に政治の心構えを説いた言葉ですが、「速やかならんこと」を「すぐに研究成果を出すこと」、「小利」を「穴場探しの小さな

研究成果」と読み替えれば、研究の心構えにも通じるといえます。皆さんは、数年間のうちに学位論文を完成させないと課程を修了できないという意味では、時間が限られています。だからといって、結果が得られやすい研究に走ってはいけません。

大学院での研究の意味は、学位論文という形で研究成果を挙げることにどまりません。皆さんが将来研究の道に進むにせよ、あるいは高度専門職業人として社会に出て仕事をするにせよ、大学院での研究が皆さんの将来の土台を形成することになります。そして、その土台は広く、強固なほど、その上に高い山を築くことができますから、皆さんには、大学院での研究でそういう土台作りを心がけてほしいのです。

では、どのように研究すればよいのでしょうか。自分が専攻する専門分野に閉じこもり、その専門分野の価値に囚われていては、創造的な研究は期待できません。私は、皆さんに、他の専門分野に越境する努力を求めたいと思います。自分の専門分野だけでなく、隣接分野にも広く眼を配り、内外の研究者の業績を貪欲に渉猟する。他分野を専攻する大学内外の大学院生と議論する。留学の機会があれば、その機会を活用し、海外の研究水準にじかに触れる。こうした研究が学位論文を作成するためにも、将来の研究の土台作りのためにも、重要になるのです。

ここで付加しますと、こういう専門分野の枠を超えた研究は、「**science for science**」の推進だけでなく「**science for society**」の推進、日本語で言うと「学術のための学術」の推進だけでなく「社会のための学術」の推進が求められるという、学術研究の現段階が要請しているものでもあります。このことについては少し説明が必要でしょう。

言うまでもなく、学術研究の本質は「真理を探究するという人間の基本的な知的欲求に根ざす」ところにあります。したがって、学術研究は「学術のための学術」を原初的で原基的な在り方としています。実際、これまで、研究者が成し遂げてきた偉大な科学的発見のほとんど全ては、社会への貢献を目指すことから出発したのではなく、純粋に未知なるものへの興味から生まれたものであったと言えるでしょう。

しかし、学術は諸科学へと細分化しながら発展し、その科学とそれを生かした技術は、現に「あるもの」を変える力をもつものとなり、自然と人類社会に大きな影響を与えるようになってきたのです。医療と公衆衛生、医学の進歩がもたらした難病克服、人間の寿命延長、物質的豊かさに支えられた便利で快適な生活等々、科学と技術の発達が人類社会にもたらした恩恵は、計り知れない

ものがあります。

しかし、メリットばかりではありませんでした。科学と技術は、その発展によって人々に恐怖や不安を抱かせる側面ももたらしました。核兵器の蓄積とその分散、地球温暖化や生態系の危機、貧富の格差の増大、水と食料の分配の不均衡など、いま私たちが直面している地球規模の問題も、科学と技術の発展がもたらした結果の無視できない負の側面と言わなければなりません。

そして 21 世紀の今日、科学と技術は、あるものを認識する段階、あるものを変化させる段階から、これまでなかったものを意図的に創造できる段階に入ってきました。その典型は生命科学であり、生命の仕組みの解明と操作技術の開発が進んでいます。その発展は人類の未来に新しい可能性を開く半面、人間存在の根底に係わる問題を提起しています。そのことから科学・学問そのものに限界を設けるべきではないか、という論議さえ出てきているのです。

学術がこのように発展した結果、社会に対する科学者の責任という視点を盛り込んだ「社会のための学術」の推進が求められるようになってきたわけです。

そこで、この場であらためて、「学術のための学術」と「社会のための学術」の定義を示しておきたいと思います。日本における科学者コミュニティである日本学術会議によれば、それは、「社会的に承認されている価値や目的から独立に、自然や社会現象などの『あるもの』について認識し、理解を深めること、すなわち『学術のための学術』」であり、「人間社会における利益を促進し、あるいは問題解決のための実用を目的とし、制度や技術を開発すること、すなわち『社会のための学術』」というものです(『日本の展望—学術からの提言 2010』)。

このように定義すれば、例えば数学は「学術のための学術」の学問領域に入ると直感的に判断できるように、どの科学が「学術のための学術」の学問領域、どの科学が「社会のための学術」の学問領域、という大雑把な分類はできるでしょう。加えて、旧来の区分法を用いるならば、どの科学にも基礎研究と応用研究という違いがあります。しかし、相対性理論、量子理論が 40 年もしないうちに広島、長崎に投下された原爆の開発につながってしまったように、また逆に生物学者の下山脩博士がクラゲの研究で一昨年ノーベル化学賞を受賞されたことに示されるように、現段階の特徴は、科学と科学の間、基礎研究と応用研究の間、科学と技術の間、「学術のための学術」という在り方と「社会のための学術」という在り方の間が、時間的にも距離的にも縮小していることにある、と言わなければなりません。

ここに集われた皆さん。皆さんは、大学院ではそれぞれの専門分野で研究しますが、大学院を修了して様々な現場で仕事をしていく段になりますと、学術

のこういう発展段階の中、「学術のための学術」の推進と「社会のための学術」の推進という二つの側面から、仕事の価値と責任が問われてくることになりま
す。その意味でも、専門分野を超え、自然科学、人文・社会科学の垣根を越え
て知見を広げ、幅広く強固な土台作りを心がけていただきたいのです。

この場合、「他者」の視点で自分を見直す、自分を相対化する、ということが
より強く求められます。他の専門分野の研究者が発する声に真摯に耳を傾ける
姿勢が必要なのです。それが別の分野の研究者にも、また研究者でない素人
にも理解してもらえるように、そして社会に対して説明責任を果たしていける
ように、自分の専門的知見を研いでいく途といわなければなりません。このよ
うに言いますと、研究の方法は、社会の中で他者の声なき声を聴くというすべと、
相通ずるといえることが分かるかと思えます。

以上、私は、専門分野を超えた研究ということをお話しました。専門分野で
学位論文を作成するという課題を抱える院生の皆さんには、あるいは過大な要
求をしているように見えるかもしれませんが、学位論文を作成するためにも重
要だということをおこななければなりません。学位論文を作成するうえでも
もっとも肝心なのは、論文テーマの設定ですが、専門分野を超えた研究はテ
ーマ設定の鍵を握るとも言えます。学位論文はテーマを絞らざるを得ませんが、
こういう広い視野からの研究が、学位論文の立ち位置を正確にマッピングし、
今後の発展可能性を示すものとなって生きてくるのです。

最後に、学位論文の作成を目指す皆さんのために、再び中国の古典から引用
しておきます。

「見る所、期する所は、遠くして且つ大ならざるべからず。然れどもこれ
を行うは、またすべからく力を量りて漸あるべし」

これは、朱子学の精髓とされる 1176 年刊行の『近思録』にある言葉で、「目
標は遠大に、実行は着実に」というほどの意味です。

「見る所、期する所は、遠くして且つ大ならざるべからず。然れどもこれ
を行うは、またすべからく力を量りて漸あるべし」

なかなか味わい深い言葉といえるのではないのでしょうか。

これをもって私の式辞を終わります。

皆さん、埼玉大学大学院へのご入学、おめでとうございます。

平成 22 年 4 月 7 日

埼玉大学長 上井喜彦